リレーコラム

食卓が勉強机

吉村　幸代

桜の記憶

「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月の頃」と詠んだのは西行法師。

ことのほか雪の少ない冬が過ぎ、新しい季節が訪れた。誰もが待ちわびていた、生命萌える春。例年より心なし早めに桜花が満開となった日、父が逝った。

深夜の病院には、あちこちの病室から軽微なアラーム音がひっきりなしに鳴り響いている。わが父の枕元のモニターだけが押し黙ったまま、音を発しない。

白衣の人たちが深々と頭を下げて去った後も、私は病室の窓から外を眺めていた。東の山が薄明を帯びてきた。夜と朝の間の薄い闇に、ほんやりと浮かび上がる白い影。

桜、桜、桜…

…どこまでも

桜。淡い肌色に霞んだ城下町。生きている限り私は、この花が咲く度に、今日の日を思い出すことになるのだろう。

父が初めて入院した頃には、残り柿の赤色が晩秋の青空に映えていた。ひと冬を経た今では、おびただしい数の鳥がついばんでいた柿もすっかり干からびて、枝先にしがみつく小さな黒点だ。種は、生と死を繰り返して存続している。

前日も私は夜遅くまで病室にいた。父の鼻に差し込まれた酸素吸入器はボコボコと音を立て、心電図の波形は次々と生まれ変わるように上書きを繰り返す。口をあけたまま眠り続ける父は、喘ぎながら痩せた身体に息を吸い込む。その度に喉仏が上下するさまを、私はじっと見ていた。昨夜、父は確かに生きていた。

「医師の告げる存命期間は、不思議なほど的中するものだ」と、人の死に関わった者たちは口を揃える。悲しいことに私も、それを実感する立場となった。

昨秋、父が余命半年と宣告された時、自分が公民館長職にあることを私は初めて悔やんだ。看病に携わる時間が存分に取れない。「年度末で館長をおりようと思う」と切り出すと、即座に父は遮った。「続けていてくれ、何があろうとな」。

父は入院十日前に観た寿台文化祭の感動を語り、「太鼓連を育て上げるまで辞めてはいけない」と強い口調で言った。私は深く頷き、地区高齢者クラブの正副会長氏がかけてくれた言葉を胸の内で反芻した。「館長、覚悟を決めるんだ。」逝く分には仕方がない。その一言が私を支えている。

人間らしく生き抜くをもち続けて死ぬこと。そして、その人がしていたことを、最期で尊重し続けて看取る。更に難しい。

思い出の場所に別れながら、安曇野の自宅帰り着くと、小雨が降った。しとしとと降る雨は、一晩であっけなくらせた。桜は散る際がよさが好まれる、と誰かがそっと呟くのだった。

（寿台公民館長、主婦市）